

ふるさとの子どもを育む木島平型教育の推進

木島平村は、長野県の北部に位置し、千曲川を挟んで飯山市の対岸にあり、南に高社山、東はカヤの平高原、北は毛無山系と三方を山に囲まれた自然豊かな所です。平成22年に3つの小学校（北部小、中部小、南部小）が統合し小学校が1校となり、この統合を契機に、木島平小学校の授業改善を中心とする学校づくりによって中学校の教職員や村民に「ふるさと木島平を心に刻む教育の実践」により、子どもたちに農村生活の価値を実感させ、村づくりの担い手として育ててほしいと願いが浸透してきました。

現在、小中学校では協同的な学びを形成し、質の高い学びを一貫して追い求めることを通して、子どもたちに生涯にわたり学び続けるための基礎力を養う教育を推進しています。私たちは、小中一貫型教育と学校のコミュニティ化によってその充実を図ることを、「木島平型教育」と呼んでいます。

21世紀社会に求められる「資質・能力」を育てる教育への挑戦 ～持続可能な開発のための教育～

中央教育審議会が取りまとめた「子供の発達や学習者の意欲・能力に応じた柔軟かつ効果的な教育システムの構築について」の答申では、小中一貫型教育の制度をはじめとする学校間連携の一層の推進を謳っています。本村が推進している小中一貫型教育は、組織上独立した小学校及び中学校が互いに連携し、9年間の教育課程を4（前期）・3（中期）・2（後期）で編成して、教育活動を進めていくというものです。

私たちは、間違っても恥をかくかもしれないという子どもたちの不安感を解放し、共に学ぶ喜びに満たされ、子どもたちが自ら、将来を展望することができる学校づくりを進めてきました。つまり、「すべての子どもに学ぶ権利を保障する」学校づくり、授業づくりをどう進めていけばよいのかという点に立脚し、教育活動を展開しています。

これからの21世紀社会に求められる「資質・能力」を育む教育に向けて、また、課題が多様化・複雑化するグローバル社会において、「自律していこうとする」一人一人の子どもが、様々な人たちと「協働」しながら、新しい価値を「創造」する学びを具現していけるよう、私たちが支えていく必要があります。こういった営みにおいて、「持続可能な開発のための教育」に着手していきたいと考えています。

このような木島平村小中一貫型教育を推進するにあたり、教育課程とその理念、精神を小中学校共に共有し、日々の教育実践につなげています。

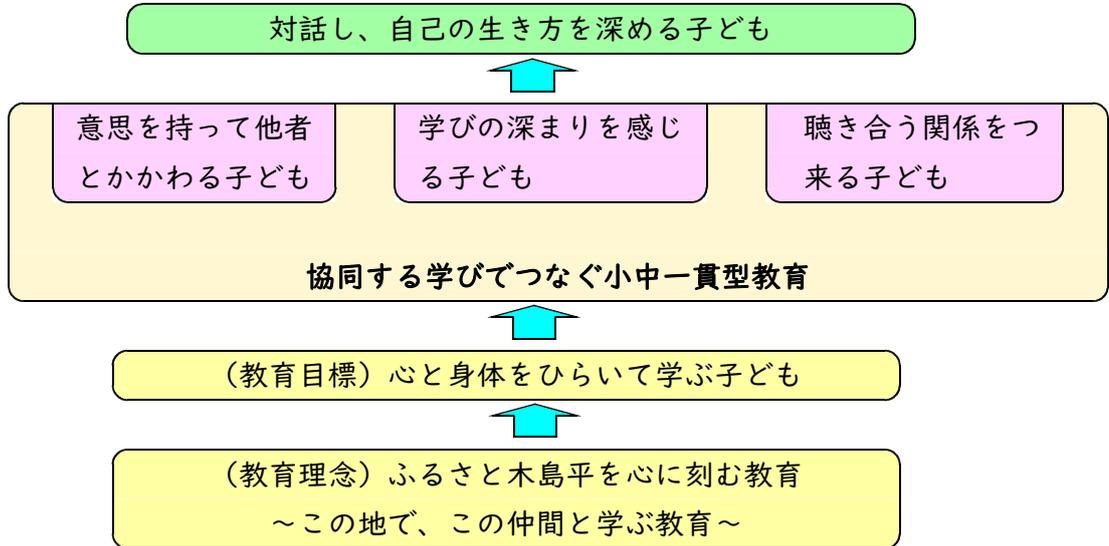
（1）教育理念と教育目標

ふるさと木島平を心に刻む教育の実践（教育理念）

子どもたちは、人生の中で最も心と体が成長する児童期や青年期の大半の時間を学校で過ごします。学校でのあらゆる出来事は、義務教育を修了して何十年たっても、記憶として残り、財産となり、宝となります。この学校でしか学べないもの、この仲間としか学べないものを学ぶことを「ふるさと木島平を心に刻む教育の実践」と唱えています。

心と体をひらいて学ぶ子ども（教育目標）

そのために、学校教育目標「心と体をひらいて学ぶ子ども」を掲げ、木島平の地に生きる私自身が、対象（ひと・もの・こと）や仲間、そして自分との対話を重ねながら、自分自身の生き方を深め、新たな自分を発見することを目指します。



(2) 小中一貫型教育の3視点

視点1

経営の基本を「『対象・仲間・自分』との対話によって自己の生き方を深めめる子どもを、協同する学びを通して育成する学校づくり」とする

- ・子ども、教師、保護者、村民が互いの声に耳を傾け、思いや願いを感じる
- ・教師と子どもが自己の生き方を深める学びを追い求め、挑戦し続ける
- ・他者に開かれた学校づくり・授業づくりを展開すること

視点2

「協同する学び」でつなぐ一貫型教育により、「対話し自己の生き方を深める子ども」を育む

- ・意思をもって他とかかわる子ども
- ・聴き合う関係を創る子ども
- ・学びを自分の考えや思いと結び付け、その深まりを感じる子ども

視点3

「発達段階に応じた指導」と「地域との連携」をキーワードに教育システムを構築する

- ・義務教育9年間で4（前期）・3（中期）・2（後期）で構成する。
- ・小中一貫型教育による学校経営を扶ける学校運営協議会を設置する。
- ・持続可能な社会の実現をめざし、各教科及び領域において地域との連携を図る。

(3) 義務教育9年間で4・3・2に区分

小学1年生から中学3年生までの義務教育の子どもの学びには、発達段階によって特徴があり、その特徴や学びを積み重ねることで、9年間のスパンをもって教育することで、将来につながる成長を期待できる。

☆ 主体性・社会性を培う課程（前期） 小1～小4

これまでの経験やそれによる思いや願いを基に、五感を総動員し、対象に働きかけていく。その中で、自他のつながりを少しずつ感じながら、対象が自分事になっていくプロセスを通して、主体性や社会性を培っていく。

☆ 思考力を高める課程（中期） 小5～中1

友と協同したり、自己に問いかけたりしながら、ものごとを多面的・多角的に見つめ、その理を追究する学びが繰り返し行われるようになる。このような他とかかわり、自分と結び付けながら自力で問題を解決する学びを通して、子どもたちは思考力を高めていく。

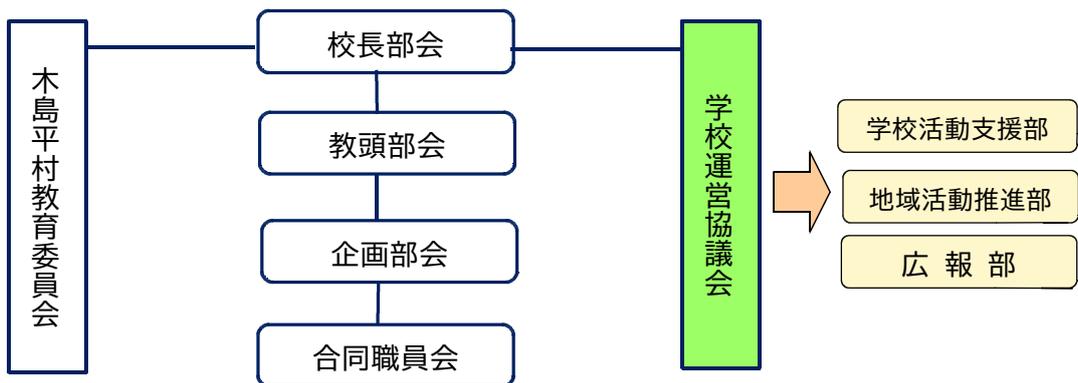
☆ 自己の生き方を深める課程（後期） 中2～中3

より広く、社会とかかわりを持つ中で、願いや課題を抱いた子どもたちは、協同と対話による学びによって、社会を見つめ、その理を広く自分と関係づけていく。このような学びを通して、自己の生き方を深めていく。

(4) 小中一貫型教育を扶ける学校運営協議会の設置

協同する学びを重視し、保護者や地域の皆様の参画による一貫型教育を進めている。「対話し、自己の生き方を深める子ども」を支えるには、学校と家庭・地域が双方向の信頼関係のもとに「情報、課題意識」を共有し、解決に向けた「行動」、さらには、その「評価・成果」を共有することが不可欠である。そのため、学校関係者評価の充実と学校運営協議会の設置を柱として学校を地域に開くことを促進している。

学校運営協議会を位置付けた一貫型教育の組織図



【活動の目的】

ふるさと木島平を担う子どもたちを、地域総ぐるみで育てよう！

【目指す子どもの姿】

豊かな人間性と自律性を備え、郷土愛と誇りをもてる子ども

木島平小中学校で取り組む「協同の学び」について

(1) なぜ? 「協同する学び」なのか

「協同する学び」への取組を始める以前は、一斉授業が中心であり、子どもたちは「わからない」ことが恥ずかしく、教師からの指名に正解を言わなければと一人一人が必死だったり、個人の追究で完結したりしていた。しかし、学び合う授業スタイルのなかでは、「これわかんないから教えて」と友だちに伝えたり、「このことはこう思うけれど、どうかな」「私はこう思うよ。どう」と語り合ったりする。そのような対話を通して自分の考えを高め、その中で自己の生き方を深めていく喜びが生まれてくることが分かってきた。

教師が一方向的に説明するだけの一斉授業から脱却し、子どもが主体的に学び合う「協同する学び」を構築し、すべての子どもの学びを保障する教育の実現を目指している。

(2) 協同する学びとは

対話的コミュニケーションを基盤として、課題について少人数で互恵的に学ぶこと

- ◆対話的コミュニケーションでは、「対象・友達・自己」の対話を大事にしている。この三つの対話がバランスよく成立する授業づくりによって、聴き合う、問い合う関係が活性化する。
- ◆互恵的とは、互いの心や体と対話しその状況に共感してかかわる様を示す。

(3) 協同する学びの効果とは

4人で構成されるグループによる学び合いは、一人一人の生徒が、自らの求めの中で素材と向き合ったり、他者と学び合いを進めたりする機能がある。一斉授業では、全体の中で自分が埋もれてしまうことが多くあるが、協同する学びでは、どの子も自らの求めの中で学びに参加することや、すべての子どもに学ぶ権利を保障することができる。

(4) 他者の「わからなさ」や考えに丁寧に寄り添う

「ねえ、どうしてこうなるの?」といった問いや「こう思うけれど、どう?」といった考えを発し聴き合うことから、学び合いが生まれる。これに応える子どもは、相手のつまづきを理解して相手がわかるように説明したり、相手の考えに対して自分の考えを重ねたりしていく。それを受けて、考えを整理したり、統合したりすることを重ね、自己の考えを深めていく。

このように他者の援助や考えを媒介に思考することを通して、子どもは一人で学ぶことの限界を超えることができる。

(5) 授業づくりを学級経営・学校経営の根幹に据える

「協同する学び」によって、「学級のみみんなで協力して何かをやり遂げてうれしい」という満足感や達成感を得たり、「学級の一員として、自分が認められ、必要とされている」という自尊感情や自己有用感が育くまれたりする。学校生活の大部分を占める授業づくりこそ、子どもたちの「学習保障」と「心の教育」の両面への最大の支援となる。

木島平小中学校で取り組む「学校づくりビジョン」について

「ふるさと木島平を心に刻む教育」の目指すところは

日々の教育実践によって どの子ども「対話し、自己の生き方を深める子ども」へと育むこと

木島平小・中学校では、教育理念と教育目標を共有しています。公教育9年間、子どもたちとかわり合う私たち教師の使命は、木島平村の「ひと・もの・こと」に学び、どの子どもにとっても成長の糧としての「ふるさと」を刻む教育活動を推進するとともに、多様化する次代の担い手となって、力強く歩いていける子どもを育むことです。

社会が変化しようとも、自身の夢や目標に向けて歩み続ける「対話し、自己の生き方を深める子ども」を育むことが、木島平教育で目指す子ども像です。

☆学校づくり **多様な価値観を持った方々との出会いで子どもを育む**

学校は、どういう場所なのだろうか。子どもたちにとって学びのある「学校」とは、どんな場所なのだろうか。教師にとって働きやすい「学校」とは、どんな場所なのだろうか。保護者にとって我が子を喜んで通わせたい「学校」。地域の方々が、未来を託す育みに信頼を寄せる「学校」とは、どんな学校なのだろうか。普段、あまり考えもしない「学校」という存在を、もう一度問い直す必要に迫られていると感じています。

少子高齢化が進む現在、「公教育」としての学校は、次の世代を担う子どもたちにどのような力を育み、子ども自身が人生の豊かさを希求し続ける「生きる力」、換言すれば「自己教育力」の育成につなげていくかが求められていると言ってもいいでしょう。

このような「学校」を実現するために、教師として、保護者として、地域住民として、為すべきことは何であり、どのような取組を日常化していくことが必要なのかが問われています。

☆子どもを育てる **子どもの「自己教育力=対話し、学びを深める子ども」を育むために**

教師は、経験の内側にある「学校」という存在が、知らず知らずのうちに内在化しています。「ずっとそうしてきた。こうあるべきだ。こうでなければならない。」等々のやり取り。このやり取りの中にあるものは、私たちが今日までの経験の中で、自身の理想とする学校の原風景を作り上げたことによって発せられています。しかし、立ち止まって考える必要があります。

これからの時代は、子どもたちも私たちにとっても未経験の時代が到来します。人工知能(AI)が発達し、多くの職種がそのAIにその業務を委ねる時代がもう目の前に迫っています。山間地の学校だから、自然豊かな木島平村には、そのような変化は関係ないと言うのは無責任です。

公教育を修業した子どもは皆、社会の一員として自身の夢や希望を極める道を歩み始めます。多難な社会であることは誰しもが予想するところです。

では、学校は子どもたちにとってどうあるべきか。そして、私たち一人一人は、子どもたちと日々向き合い、どのように自己教育力を育てていくのか。独りで、また組織で、どのようなことができるかを問いながら、授業づくり・学級づくり・学校づくりをしていくことが求められています。

☆教師の居方 子どもにとって最大の理解者であり支援者で在り続ける

教師は、子どもにとって最大の理解者であり支援者であってほしいと思います。多感な小中学生と向き合う私たちは、自身の価値観を押し付けるような行為は極力控えなければなりません。小学校から「子どもで入学し」中学校は「大人で卒業」していくと言われるほど、子どもたちはひと山ふた山を超える時期であることを理解して向き合うことが重要だと言えます。このような教師の居方は、子ども一人一人は人格を持つ学び手であることを尊重すること、そして、教室は自由な創造的な場であることが必要です。

このような関係でつながる教師と子どもで築く学級文化は、子どもたちの学校生活に潤いと居心地のよい学級づくりにつながっていくと考えられます。

☆授業観 「教え合い」から「学び合い」への発想の転換

学び合う関係と、教え合う関係は全く別物です。「できた人は教えてあげて」これは教え合う関係です。「分からない人、訊くんだよ」「互いに考えてみましょう」これは学び合う関係です。教え合う関係だと、「なぜ教えてくれないの？」という受け身の姿勢をつくってしまいます。それとは真逆に、自分で支援・助言・考えを求める子どもを育てたいものです。参考になるよい方法は「写してもいいよ」と言える教師の構えが、分からないこと、納得できないことを周囲の友だちに訊ける関係をつくり上げます。分からないことを周囲の友達に気軽に訊いたり、自分の考えを投げかけたりできる関係を築くことが、学び合いの始まりと言えます。

学びは「真似び」であり、子どもたちは「なぞりながらたどり、たどりながらなぞる」存在でもあります。

☆聴き合う関係 子どもの話を聴ける教師のもとで、聴ける子どもが育つ

私たちは、これまで様々な指導方法なるものを取り入れ、子どもと日々向かい合ってきました。「ハンドサイン」「聞く態度」「声の大きさ」「姿勢」等々、このように形式的な手法から脱却すると、子どもたちから自然とその行為が無くなっていきます。これは、「そのことに何の意味があるのか」を教師が認識した時点で、そのような手法は解消していくのです。

教え合う関係は一方的な関係ですから、言い換えれば「お節介の関係」であり、「価値観の強制」といえます。学び合う関係は、「さりげない優しさの関係」です。このことを認識し、教師も子どもの声を丁寧に聴くことが必要です。

この姿勢は、子どもたちに浸透し、「分からないことは訊ける」「友だちの声を聴ける」関係づくりへと広がっていきます。まずは、子どもの声を、そして声なき想いを聴ける私たちになることです。また、「話し合い」は、わかっている子、知っている子によって行われます。しかし、学びは、聴いている時に生まれていきます。「聴き合い」の姿勢は、どの子の発言の重みも同じように聴いていこうとする対等で自由な雰囲気形成すると同時に自己内対話を深めていきます。

☆真正の学びへ 学習の本質を捉え直し、子どもの学びを支える教師に

何より大事なことは、子どもの視点に立った学習になっているかという点です。対象との対話を通し、それらを意味づけていくのは子どもたち自身です。「子どもの学びを見つめ、学びの主体者である子どもを、どのように支えることができるか」という点が、課題になってきます。

○子どもの学び

- ・これまでの経験の中で、自己を深めてきた子どもが、対象に出会い、その子ならではの「問い」や「願い」を抱く・協同する学びで学習を深めていく
- ・正解を覚えさせられるのではなく、子ども自身が意味化を図り、思考を深めていく
- ・その教科ならではのものの見方や考え方に没頭していく
- ・課題解決の方策を見つけて、さらに追究していく
- ・考えを表現したり、友からの表現を受け止めたりすることを繰り返す中で、考えを統合し深めていく

○子どもの学びを支える教師

- ・対象に対する、子どもの認識、思い、願いなどを見つめる
- ・対象との対話を通して、子どもが学んでいきたいこと、自己の生き方を深めていきたいことを見つめる
- ・その教科ならではのものの見方や考え方でその子をとらえる
- ・対象に対する子どもの「問い」や「願い」、その教科ならではのものの見方などから、子どもの考えの統合や深まり、そのための学びの道筋を考える

このように、単なる知識の習得ではない広がりやを教科学習で追究していく必要があります。自分が理解したことを友だちに伝える喜び、友との追究で納得したり考えを統合し深めたりした喜び、そうした喜びが内発的動機付けを高め、より深い学びを目指していく。このことこそ、私たちの追究している「学び合い」の本当の意味での価値であると思います。子どもがもっと意味を分かりたい、世界の広がりを知りたい、知識がつながっていることが面白いということ、学びの中心に据えることが大切です。それには、子どもが授業で経験したことの意味付けを、教師が明示化していくことが必要とされます。

☆同僚に学ぶ

教師も同僚に学ぶことで教育力向上に努めたい

私たち教師が学びの場の中で喜び合うことは、子どもと「共に学んでいる実感」です。教えているという感覚ではなく、目の前の子どもが課題解決に向けて学び合っている、教師も子どもの学びの輪の中に「居る」という実感こそが、私たちが動機付けるし、教師としてのやり甲斐を感じさせるのではないのでしょうか。

私たち教師もまた子どもと同様に、教師としての自身の教育力の向上を目指す必要があります。「学びは独りでは成立しない」の言葉があるように、私たちの教育力向上も決して独りでは成立しない。同僚の実践から学びながら自身の教育力の向上を目指したいものです。

木島平小・中学校では、仮説実証型の授業から脱却して13年目を迎えます。私たちが今まで経験してきている知識伝達型の「知識の習得」から「意味理解」への変革です。今までの経験知に頼ることなく、目の前の「子どもの事実に学ぶ」ことを大事にしながら、令和7年度の木島平小・中学校でのスタートとしたいものです。